

【論考】

質料から器官なき身体へ

——『千のプラトー』におけるイエラムスレウ言語素論の意味－質料受容にもとづいた考察

平田 公威

はじめに

ドゥルーズ＝ガタリのキャリアにおいて、『千のプラトー』の重要性は疑いえないだろう。この著作で提示されるさまざまな概念は、さまざまな仕方で連結し合い、複雑な布置を描いている。たとえば、「リゾーム」や「ミクロ政治」といった概念は、重大な問題系をなしている。そのほかにも、さまざまな概念に着目し、さまざまなことを論じることができるだろう。本稿では、そのなかでも「質料」(matière)に着目したい。この概念は『千のプラトー』の体系において重要な位置をもち、以下にみるとおり、「カオス」や「表現の質料」、「分子状の質料」、そして「系統流」や「器官なき身体」など、さまざまな仕方で論じられている。本稿の考えでは、なんらかのテーマを論じるにせよ、体系的に再構成するにせよ、『千のプラトー』を読解するうえでは、この概念を理解することは看過できない課題である。

簡単に、『千のプラトー』での質料の位置づけを確認しておきたい。質料は、もともとはレイ・イエラムスレウ(1899-1965)の「言語素論」(glossématique)に由来する、「地層」(strates)にかんする概念であり、『千のプラトー』で一貫して論じられるもののひとつである。第三プラトー「BC10000年——道徳の地質学」で主題化される「地層」は、この著作の体系をなす理論であると言えるが、質料は「表現」(expression)と「内容」(contenu)に並ぶ基本的な概念である。このことから、その重要性は理解できるのだが、それ以上に、「質料」が「器官なき身体」と呼ばれていることが、この概念の重要性を示している。

質料と呼ばれるのは、存立平面あるいは〈器官なき身体〉、つまり形式化や有機化されていない身体、地層化されていない脱地層化された身体である〔……〕(MP 58/上 100-101)。

言うまでもなく、「器官なき身体」(corps sans organes)は、『千のプラトー』を代表する概念のひとつである。この概念が質料として論じられていることは、この言語素論由来の概念に置かれた哲学的な賭け金の大きさを示しているし、この概念の練りあげに、ドゥルーズ＝ガタリによるイエラムスレウ読解の独創性が発揮されているとも言えるだろう。したがって、質料概念が、どのように『千のプラトー』で受容され、哲学体系内に位置づけられ、独自の概念にまで練りあげられているのかは、明らかにされるべきである。

そこで、本稿では、質料概念がもつ二つの側面の理解を試みる。第一に、地層のなかでの側面であり、段々と凝固させられてしまう側面である。第二に、脱地層化した側面であり、器官なき身体と呼ばれる側面である。これにあたり本稿では、まず言語素論の学説を概略することで、質料を含めた基本概念について確認し(第一節)、ついで、質料の地層化について検討する(第二節)。そのうえで、脱地層化の運動のなかに置かれた質料について考察し(第三節)、ドゥルーズ＝ガタリによる独創的な仕方での質料概念の鑄なおしと(第四節)、その概念の射程について論じたい(第五節)。

1. 準備的考察

そもそも、質料とは何であろうか。上述したとおり、この概念は言語素論に由来するものであり、「表現」や「内容」、「形式」や「実質」に並ぶ基本的な概念である。ドゥルーズ＝ガタリは、これらの概念をかなり忠実に理解した上で、自らの哲学体系に取り入れているため、まずは、言語素論の基本概念についてまとめて、『千のプラトー』読解の準備としたい。

1-1. 言語素論の分析手続き、あるいは形式について

デンマークの言語学者レイ・イエラムスレウが提唱した言語素

論は、ソシュールを嚆矢とする構造主義言語学の系譜に名を連ねる言語理論である。「イェルムスレウ派にとって、言語とはなによりもまず結合関係であり、言語学者の目的は結合法則を発見することである」⁽¹⁾ と言われるように、言語素論はテキストを通じた関係性のパターンの分析を目指している。たとえば、言語素論にしたがえば、フランス語の文法カテゴリーである、限定辞(冠詞、指示詞、所有詞)と名詞、形容詞は次のように説明される。まず、限定辞と名詞は、両者がともに現れることでしか文中に現れることがなく、一方が現れるときには他方も現れる。これに対して、形容詞と名詞の関係はそうでなく、形容詞がなくても、名詞は文中に現れることができる。つまり、名詞は、文に現れるために限定辞を必要条件にするが、形容詞についてはそうでないという規則が明らかになるのであり、こうした言語的要素の関係性によって、カテゴリーとして定義されるのである⁽²⁾。そのほかにも、たとえばフランス語で書かれる「q」という文字は、そのあとにはかならず「u」が続き、単語の最後に置かれることがない、といった規則により定義される。

このように、ある言語に現れる要素間の関係を分析することで、カテゴリーが記述される。言語素論では、このように要素間の関係性によって定義されるものは「形式」(forme)と呼ばれる。ここで注意が必要なのだが、形式は、関係性によってのみ定義されるため、その実際の「使用」(usage)は言語素論の関心ではない⁽³⁾。そのため、フランス語の音声の形式「r」は、それがどの要素に先行し後続するか、単語中のどの位置に現れうるかによってのみ定義され、それがどのように発音されても構わない。このいささか極端にも思える帰結は、次の一文にはっきりと表れている。

もっぱら形式だけを前提とする体系を通して、言語に特定の構造に到達しようとする理論は、パロールの流動と変化を絶えず考慮しながらも、これらに優越的な役割を与えることなく、言語外の「現実」には根を下ろさない恒常性を必然的に追求しなければならない⁽⁴⁾。

たとえば、「r」というフランス語の音声形式は、さまざまな仕方で発音されうる。だがあくまでも、形式とは恒常性であり、「実現されうるもの」(un réalisable)ではあるが、「実現されたもの」(un réalisé)ではない⁽⁵⁾。イェルムスレウが記述しようとする言語の姿は、このようにきわめて抽象的なものなのであり、それは、たとえば辞書に載っている語をすべて新しい語と入れ替えても、それがもとの要素間の関係に一致しているのであれば、同じ言語であると認められてしまうほどなのである⁽⁶⁾。

1-2. 意味-質料、あるいは言語素論的な物質について

きわめて重要な論点であるので、もう一度確認しておこう。言語素論が記述を試みる形式とは、関係性のパターンである。実際にテキストとして与えられるのは、さまざまな仕方で形式が実現されたもの、すなわち「実質」(substance)であるが、言語素論の分析では、ここにとどまることは許されない。物理的な質をもつ実現されたものからさらに進んで、その関係性を記述し、非物理的な形式を抽象しなければならない。したがって、たとえばフランス語の音声形式「r」は、いかなる物理的な質によっても定義されることがない。つまり、いわゆる「ふるえ音」のような「弁別特徴」(traits de distinctif)によっても定義されないのである。形式は、関係によって、ネガティブな仕方でのみ定義されるため、あらゆる実現に開かれている。そのため、言語素論では、弁別特徴のような「物理的な言語形式」は「規範」と呼ばれ、これに満足する分析はその不十分さを批判される⁽⁷⁾。形式とは、物質的に現実化されたものには還元されない「非物理的なもの」(l'incorporel)なのである⁽⁸⁾。

このように、言語素論はソシュール的あるいは構造主義的な言語観を徹底するのであるが、ここからもうひとつの帰結が導かれる。形式という恒常性が非物理的なのであれば、言語にとって「物質」(le matériel)とは、非関与的なものであり、どのように分析しようとも「可変素=変数」(variable)としてしか扱うことができない⁽⁹⁾。形式という恒常性に対して、物質とは、いわば可変性なのである。たとえば、フランス語の音声形式「r」は、他の要素との関係を維持していればどのようにも実現されうるため、発音「ki」によっても実現されうる。つまり、形式を実現する物質は、それを他の要素から識別できる特徴をそなえた物質であれば何にでもかえることができる。物質は、可変的なものであり、形式を実現しているかぎりでは「実質」と呼ばれ、形式を実現しうるかぎりでは「意味-質料」(sens-matière)と呼ばれる。たとえば、特定の物理的な質をもつ発音「r」は、フランス語の形式を実現しているのならフランス語の実質であり、ある閾値を超えないかぎりであれば、どのように発音されても構わない(そのため、「r」の連続体を考えることができる)。同様に、ある「r」という発音が、英語の形式を実現しているのなら、英語の実質になる(同様に、日本語の実質にもなりうる)。あるいは、意味-質料とは、どのような形式も実現しうる共通の質料(可変素)のことであり、言語的な形式に関係づけられないかぎりでの、単なる「r」という音声のことである。本稿では最終的には、こうした意味-質料の身分について細かな考察を行うのだが、ここでは、形式を実現しうる、物理的な質をそなえた物質が、意味-質料と呼ばれていることを確認しておこう(なお、論点を先取りして言えば、連続体

をつくる意味－質料と、共通の意味－質料、そして単なる音声としての意味－質料は、異なる身分をもつと考えられる)。

また、本稿では必ずしも重要ではないのだが、有名な表現と内容の対にかんしても付言しておきたい。この対概念は、いわゆるソシユール的な「シニフィアン」と「シニフィエ」に取って代わるものとして用いられている。つまり、表現とは、伝統的には表音や書記的な記号表現の面のことであり、内容とは、伝統的には観念内容の面のことを指す概念である。しかしながら、言語素論では、あらゆる形式が単なる組み合わせ可能性、要素間の関係に還元されてしまうため、それが、発音されたものであるのか書かれたものであるのか、思考されたものであるのかは関与的ではない。そのため、表現と内容は、排他的な仕方ではしか区別されないものであり、どちらをどう呼んでも構わないのである⁽¹⁰⁾。意味－質料という奇妙な表記は、こうした事情を反映するものであり、ある物質が、表現と内容のどちらの面の実質にもなりうるため、このように呼ばれるのである⁽¹¹⁾。

厳密さを欠くかもしれないが、以上のように、言語素論の基本概念は理解される。まずもって本稿にとって重要なのは、形式が、要素同士の組み合わせ可能性、他の要素との関係によってのみ定義され、「非物理的なもの」とみなされるといふことと、これに対して、形式を実現しているものが実質と呼ばれ、形式を実現するものが意味－質料と呼ばれるということ、そして、言語素論の分析が目指すのが、形式の記述であって、意味－質料や実質ではないということである。データとして与えられるのは物理的に観測可能な意味－質料、あるいは実質であるが、言語素論が記述するのは、その物理的に測定可能な弁別特徴、規範ではなく、形式である。イエラムスレウは、このような分析手法こそが、物理学や心理学の対象となる言語外の現実には依拠することのない、言語的データに内在的な手続きであると論じているのである。その結果、言語素論にとって、意味－質料は、あらゆる形式を実現しうるが、そのためにかえって言語的分析の対象にならない純粋な可変素として扱われることになる。

2. 『千のプラトー』における地層化のシステム

前節でみたように、言語素論には、形式と実質、意味－質料という基本概念があり、これらをもとにして、言語は、表現面の形式と実質、内容面の形式と実質という四つの項からなる「重層性＝地層化」(stratification)として記述される。本稿の関心に即して言えば、意味－質料は、表現と内容の形式による分節を被ることで実質になり、地層の構成要素になるのである。ドゥルーズ＝ガタリは、この地層概念を拡張する仕方でも独自の概念へと練りあげているのだが、そこでの質料の身分について、次のように述べ

ている。

地層とは、質料を形式化することであって、共鳴と冗長性のシステムのなかに強度を閉じ込め、あるいは特異性を固定し、大地の身体の上で大小の分子を構成し、これらの分子をモル状の全体へと入らせることにある。(MP 54/上 93)

地層にあって、質料は、分子状やモル状という状態を揺れ動く。大まかに言ってしまえば、ドゥルーズ＝ガタリは、質料がモル状の全体に組み入れられることを問題視しており、質料を分子状にすることをよとしてしている。前節で確認したとおり、ある質料は、それが他の質料との区別をもつかぎり、さまざまな形式を実現することができる。つまり、質料は、さまざまな地層に入ることができるし、そこから出ていくこともできる。しかしながら、地層は凝固し、質料を閉じ込めてしまうことがある。モル状の全体に入らせるとは、おおよそこのことの謂いである。ドゥルーズ＝ガタリは、言語素論の議論をもとにして、質料という可変性、その柔軟さを高く評価しているのだが、その柔軟さが地層のなかで損なわれてしまうことを問題視し、その地層からの解放を論じているのである。そこで本節では、地層の安定化について検討することで、どのようにして質料が地層に閉じ込められてしまうのかを考察する。地層化は、質料を地層に閉じ込める契機であるのだが、その理論の内実を解明することで、地層からの質料の解放、脱地層化への糸口もみいだせるだろう。

2-1. 冗長性、あるいは頻度と共鳴について

既述のとおり、意味－質料は、本来的に言語素論の記述の対象にはならない、非本質的な要素であり、可変素＝変数でしかない。しかしながら、意味－質料がなければ、形式は実現されず、地層も構成されない。そのため、この本来的に非言語的な要素である質料が、地層から出ていかなないようにしなければならない。先の引用にあったとおり、地層を安定させるためのシステムとして、ドゥルーズ＝ガタリは「共鳴」(résonance)と「冗長性」(redondance)を論じている。結局のところ、共鳴は冗長性の形式に数え入れられてしまい、さらには冗長性を地層化に役立てる「顔」(visage)こそが問題になるため、いささか込み入った議論になるのだが、ここではまず、冗長性をまとめることから始めよう。

『千のプラトー』では、冗長性という概念は、言語学を通じて導入されているが、これはそもそも情報工学に由来するものである。一般的には、送信可能な最大情報量に比べて、実際に送信される情報量が少ないほど、そのメッセージの冗長性は高くなる言

われる。たとえばベイトソンは、これを説明して、「メッセージ素材が「冗長性」を持つと言われるのは、そのシークエンスを、一部の項目を欠いたまま受信したときに、その欠けた項目を受信された情報からランダム以上の確率で推測できる場合である」⁽¹²⁾とまとめたとうえで、冗長であることを、「パターン形成がなされていること」⁽¹³⁾と定式化している。冗長性はおおよそこのように説明されるのだが、ドゥルーズ＝ガタリは、言語学の議論を取り入れることで、「頻度」(fréquence)と「共鳴」という二つの冗長性の形式を区別している。これらは、客観的な仕方では測定される冗長性と、主観的な仕方では測定される冗長性をもとに、それぞれ練りあげられたものである⁽¹⁴⁾。

言語学の議論から確認しておこう。まず、ドゥルーズ＝ガタリが頻度の冗長性と呼ぶものであるが、これは、言語にみられる「拘束」の現象を記述するために、客観的な仕方では測定される冗長性である。どのような言語でも、ある単位が別の単位に後続するとき、それは何らかの規則にしたがっているため、この規則を次第に増やしていけば、言語を記述することができる。そこで、言語学では、冗長性を測定することで、そうした規則を記述できると考えられている。

たとえば、その言語の文字または音素に同じ出現確率を与え、ランダムに抽出して連ねたものをゼロ次近似と呼ぶことにする。それらの単位の平均頻度を考慮に入れて抽出構成したものが一次近似である。二次近似は推移確率、すなわち先行する単位に応じて変わる出現確率を考慮に入れることになる⁽¹⁵⁾。

特定の環境で観測される英語の音素の冗長性を考えてみましょう。ゼロ次近似では、英語で観測される単位が、ただランダムに並べられるだけである(「brjffujj」)。一次近似では、英語の単位のうち、よく用いられるものが並ぶことになる(「rgwrnmjelwis」)。二次近似では、先行する単位を考慮に入れた出現確率に基づいたものが並ぶことになる(「be s deamy thall」)⁽¹⁶⁾。さらに考慮する先行の単位を増やしていけば、三次や四次の近似を得ることができるのだが、ともあれ、上の例では二次近似が最も冗長性が高く、英語らしくなっていることが理解できる。

次に、共鳴と呼ばれる、主観的に測定される冗長性である。ドゥルーズ＝ガタリが指摘しているとおり、言語学では、あまり焦点が当てられていないようなのだが、この冗長性は、「〔……〕先行あるいは後続する単位を考慮して、単位を予測するよう主体に尋ねることで〔……〕」⁽¹⁷⁾測られるものである。この冗長性は、出現確率をもとにパターンを記述する客観的な測定とは異なり、

主観的＝主体的な仕方では測定される。

それでは、『千のプラトー』では、どのように頻度と共鳴が論じられているのだろうか。頻度については、比較的分かりやすく、次のように論じられている。

シニフィアンの体制においては、冗長性は、記号や記号の要素に作用する客観的な頻度の現象である(言語における音素、文字、文字の集合)。各々の記号に対するシニフィアンの最大頻度があるのと同時に、ある記号が他の記号に対してもつ相対的な頻度がある。(MP 166/上 273)

ドゥルーズ＝ガタリは、記号がさまざまな仕方では機能するということを論じているのだが、記号が何かを意味するという、シニフィアンとして機能することが、頻度により説明されている。これは、さしあたり、言語学で論じられていたものとほぼ同様のものと理解できる。

これに対して、共鳴の冗長性は、独特な観点から論じられている。言語学の議論では、先行ないし後続する単位に対応して、ある単位を予測することが言われていたが、ドゥルーズ＝ガタリはこれを、言表の主体と言表行為の主体の対一対一関係として読みかえ、「心的現実」の「支配的現実」への下降として定式化している(MP 162/上 267)。次の引用は、この冗長性理解を端的に表わしている。

アルチュセールは、社会的個人がこのように主体として構成されることを見事に明らかにしたのである。彼はこれを「不審尋問〔interpellation〕」と呼んでいる(「おい、お前だ、そこにいるお前」)。(MP 162/上 268)

ドゥルーズ＝ガタリが言語学の議論を踏まえつつも、独自の仕方では理解していることが分かるだろう。たしかに、ここで言われていることは、ある言表の単位を考慮し、自らが属する環境にある単位を予測させることであり、言語学の議論を踏まえている。だがここでは、言表に現れる主体になるよう、「尋問」されることが論じられており、(言表)行為の主体を言表の主体にさせることが言われている。そうして、心的現実の主体は、尋問をしてくる支配的現実にしたがうようになり、今度は自ら命令するようになる。『千のプラトー』では、言表が、意味性やシニフィアン、すなわち頻度の冗長性の観点から捉えられているのだが、共鳴で言われていることは、その冗長性にしがたい、それに対応するものとして、心的現実を構築させることなのである⁽¹⁸⁾。「きみが支配的現実の言表に従えば従うほど、きみは心的現実における言表

行為の主体として命令するようになる〔……〕(MP 162/上 268) というわけである。こうした冗長性理解は、情報理論の射程を超えているようにも思えるが、実のところ、それほど意外なものではない。というのも、ベイトソンが同様の冗長性理解を示しているためである。ベイトソンによると、「雨だ」という発話を聞いたうえで実際に降っている雨を視認することは、なにも知らずに雨を視認よりも情報量が少なくなるため、冗長性がより高くなると説明できるのだが、この説明は、いわば言表の主体の心的現実への適合を説明するものであり、ドゥルーズ＝ガタリが共鳴と呼ぶものと同型の議論であると言えるだろう⁽¹⁹⁾。

2-2. 地層の安定化と凝固、あるいは顔について

このように、ドゥルーズ＝ガタリは冗長性に二つの形式を認めている。それでは、頻度と共鳴は、どのように地層の安定させるのだろうか。どのようにして、質料が形式化され、地層が凝固するのだろうか。ここで、第七プラトー「零年——顔貌性」を参照したい。というのも、このプラトーで論じられる「顔」は、これらの冗長性そのものを可能にするものであり、質料を地層に閉じ込めることで、その柔軟さ、可変性を押し殺してしまうためである。まず、顔と冗長性に関する記述をみてみよう。

顔は、はじめから個人的＝個体的であるのではなく、頻度や確率のゾーンを定義するのであり、標準的な意味作用にしたがわない表現と連結〔connexions〕をあらかじめ無力化する領野を画定する。同様に、意識や情念という主観性の形式は、顔により共鳴の場が作られなければ、まったくもって空虚なままにとどまるだろう。この共鳴の場は、心的あるいは感覚的な現実を選別し、あらかじめ、この現実が支配的な現実と適合するようするのである。(MP 206/中 14)

この引用文で明確に示されているように、ドゥルーズ＝ガタリは、先にみた頻度や共鳴の冗長性を可能にするものとして顔を論じている。つまり、一般的に思い描かれる個人の顔よりも、より広い射程をもった概念として、顔は論じられているのであり、顔こそが、地層の安定化をもたらすような冗長性を可能にする。顔は、地層の安定化の条件なのである。詳しくみていこう。

ドゥルーズ＝ガタリは、顔にかんして言われる「頻度や確率のゾーン」や「共鳴の場」について、「一対一対応化」(bi-univocation)と「二項対立化」(binalisation)という一般的な機能とともに敷衍している。簡単に確認しておこう。まず、一対一対応化は、単位や要素にかかわるものであり、ある顔と他の顔を対応関係におくことで、顔の基本的な単位をつくりだす。たとえば、「男か女

か、金持ちか貧乏人か、大人か子供か、首長か臣下か、「xかyか」(MP 217/中 31)というように、顔を識別し、頻度や確率を測定するための標準的な基本単位がつけられるのである(このとき、測定される必要のない単位はあらかじめ切り捨てられている)。つぎに、二項対立化は、選択にかかわるものであり、ある具体的な顔が、基本的な単位からどれほど隔たっているのか、それに適合するかどうか判断され、第一の単位に適合しないのであれば、何が、それに適合する第二の単位であるのか、あるいは第三の単位であるのかが判断される。先にみた議論では、言表の主体と言表行為の主体の共鳴が論じられていたが、ここではより広く、心的あるいは感覚的現実の支配的現実への適合が論じられていると言える。

このように、基本的な単位や要素の構築と、その選択と適合が、ひとつの具体的な顔をつくる。ドゥルーズ＝ガタリは、これらの仕方で作動し、顔をつくるものを「顔貌性抽象機械」(machine abstraite de visag  t  )と呼び、顔の認識について次のように記述している。

ああ、こいつは男でも女でもない、ゲイだ。二項関係は、最初のカテゴリーの「ノー」と次のカテゴリーの「イエス」の間に打ち立てられるのだが、後者のカテゴリーは、一定の条件のもとでは寛容さをしるしづけるのと同様に、なにがあっても打倒しなければならぬ敵を指示してもいる。いずれにしても、きみは認識されている。抽象機械は、きみを、網の目状の全体のなかに登録している。よく分かることだが、偏差〔d  viances〕の検出という新しい役割において、顔貌性の機械が個別的な事例では満足せずに、規範性のデータ処理という第一の役割のときと同様に、一般的な仕方で処理しているのである。(MP 217-218/中 32-33)

顔の基本的な単位があらかじめあり、それにしたがって、具体的な顔が認識されていく。そのとき、基本的な単位にしたがわない顔は、次の単位によって認識され、その単位の平均からどのくらい隔たっているのか判断され、必要であればさらにその次の単位がもちだされる。こうして、誰かが、あるいは壁の染みでさえもが、なんらかの顔として同定され、識別されることになる。ここでは、基本的な単位が規範としてはたらき、そこに属さない差異は、認識すらされない。まさに、「人種差別は、〔……〕〈白人〉の顔に対する偏差の開きを決定することによって行われる」(MP 218/中 33)のであり、このことが理由で、ドゥルーズ＝ガタリは顔を批判するのである。

2-3. 顔と規範への批判、あるいは質料を解き放つ戦略について

このように、顔の認識は、標準的な単位の形成と、その適合によりなされるが、これは頻度と共鳴を可能にもする。それでは、何かが顔とみなされるとき、どのように冗長性がはたらき、どのように質料が扱われているのだろうか。あるいは、質料が顔という実質とみなされるとはどういうことであり、どのようにして、質料がもつ柔軟さ、可変性が失われてしまうのだろうか。もう一度冗長性に引きつけながら、言語論的な例とともに考察しよう⁽²⁰⁾。

まず、ドゥルーズ＝ガタリが言う一対一対応化と二項化、頻度と共振は、どのようにはたらいっているのだろうか。パリ市内といった環境でデータを取り、分析することを考えてみたい。まず、一対一対応化により、分析において着目される単位が決定され、二項化によって、その単位の観測されたデータが適合できるかが判断される。たとえば、観測された個々の発音が、「p」という単位としてまとめられ、「b」などは異なる出現規則をもつものとして記述される（頻度の冗長性、パターンの抽出）。そして、新たに観測される他のデータも、得られた単位「p」に適合させることで、記述されることになる（共鳴の冗長性、頻度により得られた言表（意味性）の現実に即した命令と服従化、適合）。こうして、観測される質料は、特定の形式を実現するものとして、つまり特定の地層を構成するものとして理解されることになる。

ここでまず指摘しておきたいのは、一対一対応化と二項化は、どちらも質料（観測された個々のデータ）がもついくらかの差異を捨象していることである。つまり、特定のパターンを分析するにあたり、示差的な要素だけが抽出されるのである。そのうえで、頻度が測定されることで、意味－質料は、特定の形式「p」を実現する実質「p」として識別されるのであり、新たに「p」という意味－質料が与えられたときにも、共鳴によって、実質「p」として識別されることになる。こうして、「p」として許容することのできる範囲、規範が設定され、それによりデータが処理されるようになるのである。

注意しなければならないが、ある単位の定義が、他の単位との組み合わせ可能性のみによってなされるのであれば、これは言語素論の分析手続きと合致するのであり、意味－質料の可変性も正しく記述されるだろう。しかしながら、上のような手続きは、意味－質料がもつ特定の質、観測や測定が可能な質を単位の定義に含んでしまっている。既述のとおり、言語素論では、要素同士の組み合わせ可能性だけが関心にあるため、それがどのように実現されてもよく、観測可能な物理的な質によって定義される「規範」は、分析の不十分さ、抽象化の不徹底を示すものとして

退けられる。したがって、物理的な質（有声性などの弁別特徴）によって「p」を定義するのは不十分なのであり、観測される平均的な発音「p」や、その平均から隔たりによって意味－質料を特定の単位の識別していく手続きは不適切なのである（同様に、肌の色や性器などによって単位を定義することも不適切である）⁽²¹⁾。たとえば、「p」と「b」が間違えて発音されたとしても、それが形式同士の組み合わせを実現しているのなら、言語素論的には問題ないのである。

意味－質料の観点からも、整理しておこう。言語素論では、意味－質料は、さまざまな仕方でも形式化されるため、さまざまな関係を織りなす要素のひとつになりうると考えられる。だからこそ、意味－質料「p」という音声は、いわゆるフランス語の表現形式「p」を実現する実質になることもできるし、フランス語の形式「b」を実現する実質にもなりうる。つまり、意味－質料は、さまざまな形式を実現し、さまざま実質になりうるのであって、ある意味－質料がひとつの実質しかもたないと考えことは不当なのである。たしかに、実際に観測されるフランス語の表現形式「p」は、観測されたデータ（すなわち、すでに個別的な言語使用のなかにあり、実質化された意味－質料）から抽象されるしかないとしても、それが組み合わせ可能な要素である以上は、「p」という音声である必要はないし、ある音声がただひとつの実質にしかならないなど言うことはできない。ましてや、そのようにして得られた規範をもとに、新たに観測されたデータを識別することは不当でしかないだろう。このような手続きでは、形式の恒常性だけでなく、意味－質料の可変性も正しく理解されないのである。

このように考えると、言語素論による規範への批判や、言語外の現実を対象に含める言語分析への批判が、『千のプラトー』の顔批判とかなり重なることが理解できる。言語素論では、要素間の関係、組み合わせ可能性だけが抽象され、観測されたデータの物理的な質が一切捨象されている。これは、意味－質料が、さまざまな実質になりうる可変性であるための条件である。これに対して、顔や規範は、冗長性によってことあたりながらも、観測されたデータから単位を取りだし、それをもとにして、平均や標準偏差を測りながら、新たなデータを認識していく。そしてまさに、ドゥルーズ＝ガタリが顔を批判するのは、顔だけが唯一の実質として考えられてしまうためである。西洋のある環境で観測されたデータから、白人－有色人種、男－女といった、二項的な特徴により定義される単位が抽出され、それがほかの質料に適合されることで顔という実質が生産される。しかしながら、ある身体、頭部は、顔の基本的な単位を実現する質料ではなく、別の実質を実現するものであるかもしれない。質料であるかぎり、頭部は、

多様な実質になりうるにもかかわらず、顔がただひとつの実質として君臨するのである。

もはや外部があることさえ許されないのだ。いかなる遊牧機械も、いかなる原始的な多義性〔polyvocité primitive〕も、異質な表現実質の組み合わせをともなって出現することはないだろう。あらゆる翻訳可能性の条件としての唯一の表現実質が必要とされるのだ。(MP 219/中 36)

こうした顔批判は、経験的なものの超越論的なものへの転写にたいして、60年代のドゥルーズが行ったものと同型である。すなわち、経験的所与からいくらかの特徴を取りだし、それを弁別特徴して形式に転写し、この物的な形式としての規範を認識の条件にする手続きが、批判されているのである。こうして、多様な実質になりえたはずの質料は、地層のなかに、ただひとつの実質として組み込まれ、その可変性は、なんらかの単位に収まるべきものとして扱われてしまうのである。

それでは、どうすれば質料の可変性を解放できるのだろうか。言語素論的に言えば、抽象主義の徹底化によって、逆説的にも、質料のもつ可変性やさまざまな特徴が解放されると考えられる⁽²²⁾。これは、規範にとどまることなく分析を推し進めることであり、ある意味では、規範を経由して、そこからさらに歩を進めることでもある。そして、ドゥルーズ＝ガタリも同様の議論を提示している。ドゥルーズ＝ガタリの考えでは、顔を生産する顔貌性抽象機械は、実のところ顔とは類似していないため、顔を解体するには、まず、顔を認識し、顔の構成要素を抽象的なレベルに返し、そのうえで、この要素が顔とは別のものを生産するように、抽象機械をはたらかせる必要がある。二つ続けて引用しよう。

諸々の具体的な顔は、顔貌性の抽象機械から生まれる。顔貌性抽象機械は、シニフィアンにホワイト・ウォールを与え、主観性にはブラック・ホールを与えると同時に、具体的な顔を生産するだろう。したがって、ブラック・ホールーホワイト・ウォールのシステムがすでにして顔なのではなく、要素の変形可能な組み合わせによって、顔を生産する抽象機械であると言えるだろう。抽象機械が、自ら生産するもの、生産するだろうものに似ているなどと期待してはならない。(MP 207/上 15)

顔を解体すること、それはシニフィアンの壁を突き抜けること、主体性のブラック・ホールから脱出することと同じことである。分裂分析のプログラム、スローガンはこうなる。

きみたちのブラック・ホールとホワイト・ウォールを探し、それを認識し、きみたちの顔を認識しなさい。そうするのだから顔を解体できないだろうし、そうしなければ、きみたちの逃走線を辿ることはできないだろう。(MP 230/中 53)

ドゥルーズ＝ガタリの考えでは、顔になってしまった頭部を、再び取り戻すことは問題ではない。「原始人の前シニフィアンので前主体的な記号系に「立ち返ること」は問題ではないのだ」(MP 231/中 54)。そのような試みは、顔の単位を増やすことでしかなく、せいぜいホワイト・ウォールに「バウンドする」にとどまる。むしろ、必要なのは、顔の解体のために、ブラック・ホールとホワイト・ウォールを役立てることであり、要素を組み合わせることで顔を生産する抽象機械を、別の仕方ではたらかせることである。

顔のただなかで、ブラック・ホールの底とホワイト・ウォールの上でのみ、顔貌性の特徴を鳥のように解き放つことができるだろうし、原始的な頭部に立ち返るのではなく、それらの特徴の組み合わせを発明できるだろう。それらの特徴が、風景性の特徴に、つまり風景から解き放たれた風景性そのものに連結され、絵画性や音楽性の特徴に、つまりそれぞれのコードから解き放たれた絵画性や音楽性そのものに連結されるような組み合わせを、発明できるのである。(MP 232/中 56)。

顔という実質、凝固した地層をつくってしまう抽象機械を、別の仕方ではたらかせる方法を学ばなければならない。質料を顔から解き放つためには、抽象化を進めることで、質料がもつ特徴を解き放つ必要がある。そうすることで、顔から解放された特徴は、顔の組織には入らず、音楽や絵画性といった他の特徴と組み合わせられるだけの柔軟さを取り戻すだろう。そのため、顔がもつ特徴を顔から引き離す「教育法」あるいは「厳格な訓練」は、芸術からインスピレーションを受け、芸術にインスピレーションを与えもするのである(MP 211/中 23)。このように論じる第七プラトールを引き継ぐように、芸術を扱う第十一プラトール「一八三七年ーリトルネロについて」では、質料がもつ特徴の解放が論じられている。続く第三節では、第十一プラトールを取りあげ、ドゥルーズ＝ガタリが提示する戦略の具体的な展開を辿りたい。

3. 質料の解放とリトルネロ

第十一プラトールでは、その題名のとおり、リトルネロというあまりに有名な概念が主題化されている。ところで、「〔……〕ある

領土を跡付けるあらゆる表現の質料の総体がリトルネロと呼ばれる〔……〕(MP 397/中 343)とされているように、このプラトーの関心は、実のところ質料に向けられていると考えられる。ドゥルーズ=ガタリは、質料を三つ(カオス、表現の質料、分子状の質料)に区別し、それぞれ、「古典主義」、「ロマン主義」、そして「宇宙的なもの」(le cosmique)という三つの時代とともに論じている。リトルネロはそのなかで論じられる概念であり、質料の理論に位置づけられるものである。本節では、これまでにみた質料、形式-実質概念と対照しつつ第十一プラトーを讀解することで、ここでの理路が、顔-規範批判や顔の「教育法」という観点から再構成できることを確認する。これにより、リトルネロ論が、言語素論的な形式主義を主張していることと、この形式主義が質料の解放を導いていることを示す。

3-1. カオスから古典主義へ、あるいは質料と形式-実質について

このプラトーでは、まず、「カオス」という質料が取りあげられ、そこから生じるコード化や「環境」について論じられている。『千のプラトー』の考えでは、「カオスからは〈環境〉と〈リズム〉が生まれる」(MP 384/中 321)。ここで言われるカオスとは、すべてを崩壊へと導くようなカタストロフのようなものではなく、コード化へと方向付けられた質料のことであり、「時間-空間のブロック」(MP 384/中 322)すなわち「環境」を構成する「成分」(composantes)となりうるような、周期的に反復する要素としての質料である⁽²³⁾。「季節でさえ環境である」(MP 417/中 374-375)と言われるように、環境とは、周期性やパターンをもつもののことであり、カオスは、そのようなパターンを生み出すのである。そしてそれだけでなく、カオスは環境を移り変わらせるものでもある。ドゥルーズ=ガタリは、ある環境の構成がすでに次の環境を準備していること、環境が移ろうことを「リズム」として捉え、次のように記述している。

カオスはリズムと反対のものではなく、むしろあらゆる環境の環境〔=中間〕である。ある環境から別の環境へのコード変換による移行があり、環境のコミュニケーションが起り、異質な時間-空間の共調があるときに、リズムはある。(MP 385/中 323)

ここで理解されることだが、カオスすなわち環境を構成する周期的な成分は、すでにみた頻度の冗長性により測定される単位とかなり近い。つまり、観測されたデータ内での出現頻度や規則性によって規定される単位は、カオスから取りだされる成分と同様

のものと考えられる。注意しなければならないが、この質料は、すでに周期性をもつ成分としてコード化されており、かなりの程度、形式化されているとみなされるため、この点で、言語素論で記述される意味-質料とは異なっている。したがって、カオスからコードを取りだしてくるという発想は、質料にそなわる物理的な質によって規定するという規範主義的な態度に近く、言語素論的な形式主義からは遠いだろう。ドゥルーズ=ガタリが古典主義ということでおおしているのは、まさに質料(カオス)から規範を取りだして、それを適用していく態度にほかならない。二つ続けて引用しよう。

古典主義ということでは、質料-形相の関係のこと、あるいはむしろ、実質-形式、まさに形式化された質料である実質のことが理解される。他のものとの関係で、区分され中心化され階層化された形式の継起が、質料を組織しにくるのであり、形式のひとつひとつが、多かれ少なかれ重要な部分を引き受けている。(MP 416-417/中 375)

古典主義の芸術家は、〈一〉-〈二〉によってことにあたる。(男-女、男性的なリズム-女性的なリズム、声、楽器の種類、アルス・ノヴァのあらゆる二項対立性といった)分割されるかぎりでの形式の異化=分化という一-二であり、(魔笛と魔法の鈴といった)対照をなすかぎりでの部分の識別という一-二である。(MP 417/中 375)

したがって、顔が質料にたいしてそうしたように、古典主義の芸術家は、(質料から取りだされた)形式を質料に押しつけることで、実質を得るのである。

このように、古典主義の芸術家が対峙するのは、カオスであり、カオスの力であり、飼いならされることのない生の素材がもつ力〔les forces d'une matière brute indomptée〕なのであって、実質をつくりだすためには、こうした力に〈形式〉が押しつけられなければならない、環境をつくりだすためには、〈コード〉が押しつけられなければならない。(MP 417/中 375)

カオスは、形式やコードをそなえた成分を準備しており、そこから環境が生じる。古典主義の芸術家は、カオスに対して自ら選別した形式を押しつけることで実質を作り、カオスの力を無力化し、自らのものにする。ここに、前節で確認した論点、すなわち頻度の冗長性により形式を取りだしてくる、弁別特徴とい

た二項対立性によって質料を実質にすることのような論点がい
いだされるだろう。そうであるのなら、古典主義の次に論じられ
るロマン主義、あるいはリトルネ口論は、顔よりもさらに一歩進
んで、質料の解放に近づいていると考えることができるだろう。

3-2. 古典主義からロマン主義へ、あるいは領土の成分と表現 の質料について

環境やリズムを生むカオスは、コードや形式から解放された質
料ではない。たとえば、一枚の葉は、芽吹き、青々とし、紅葉に
染まり、枯れ落ち、土に還り、四季としての環境を構成する成分
であり、質料であると同時にその形式から切り離すことができな
い。したがって、この質料は、言語素論で言われる意味-質料、
可変性の質料ではない。これに対して、リトルネ口では、もはや
カオスや環境、コード化された質料や規範的な形式は問題ではな
くなり、表現の質料とそれが表す領土との関係が問題になる。す
なわち、有名な鳥の歌や、鳥の喉の色や木の葉の色合いなどの組
み合わせと、それにより表される領土の関係が問われるのである。

一般的な意味では、ある領土を跡付けるあらゆる表現の質
料の総体がリトルネ口と呼ばれるのであり、この総体は領
土的モチーフや領土的風景へと発展していく。限定された
意味では、アジャンスマンが音を発し、音により支配されて
いるというときには、リトルネ口のことを言われているの
だ。(MP 397/中 343)

歌うことは、闖入者がやって来るという外的状況に対して、自
らのもつ領土を表わすという機能をもっている。鳥は、歌うこと
で、自らの声という表現の質料を組み合わせ、自らの領土を示し、
そうすることで警告をするのである。あるいはむしろ、表現の質
料の組み合わせが、領土をもたらす。つまり、表現の質料こそが
「所有」へと向かい、「もつこと」(MP 389/中 329)を可能にする
のである。ここで重要なのは、歌うことは、特定の環境で特定
の行動を引き起こす一時的な内的衝動、すなわち、闖入者を追い
払おうとする衝動には還元されないということである。そして、
所有される領土は、もはや環境の一部ではないし、組み合わせら
れる表現の質料も、環境を構成する成分ではない。ドゥルーズ＝
ガタリが強調するのは、この表現が、外的状況や内的衝動に対す
る領土の関係を表わすということであり、表現の質料同士が織り
なす関係が自立性をもつということである。リトルネ口の重要性
は、質料同士の関係にこそある⁽²⁴⁾。この自立性をもった表現的
な関係性が、環境やコードに対する新しさをなすのである。

表現の質料のあいだの諸関係は、内的衝動や外的状況と領
土の諸関係を表わす。すなわち、それらの関係はこの表現そ
のものななかであって、自立性をもっているのである。(MP
391/中 332)

リトルネ口、表現の質料同士の関係は、表現として自立性をも
つ。これはたしかに、古典主義にはなかったものだろう。それで
は、ここで言われる表現の質料は、どのような質料なのだろうか。
さまざまな仕方でも組み合わせられるさまざまな声やさまざまな
葉っぱの色は、どのような質料なのか。まずもって明らかなのは、
もはやこれらの質料が、季節などの環境がもつコードには還元さ
れないということである。一枚の葉っぱは、移ろう季節のなかで
さまざまにコード化される(あるいはコード変換される)。これ
に対して、一羽の鳥が、色づいた葉っぱを用いて自らの領土を表
現するとき、その葉っぱは領土を構成する成分になっている。つ
まり、環境を構成する成分から「領土の成分」(MP 397/中 343)
への移行がなされている。注目すべきは、この移行に、環境やコー
ドと領土のあいだの「ずれ〔décalage〕」(MP 396/中 341)がみ
いだされるということである。ドゥルーズ＝ガタリは、この移行
の瞬間を記述しようと試み、それがあくまでも「架空の瞬間」で
あると注意を促しつつ、コードには領土が成立するための「余白」
(MP 396/中 341)があることと、脱コード化された「自由な」
(MP 396/中 342)質料が解放されていると論じている⁽²⁵⁾。
表現が成立し、領土化がなされるその瞬間には、環境にも領土に
も属していない質料が解放されているのであり、これこそが表現
の質料と呼ばれるのである。

このように、領土化を遂げるためには、その組み合わせ可能性
によって形式を表現しうる新たな質料が必要となる。ドゥルーズ
＝ガタリは、これこそがロマン主義の芸術家が立ち向かう質料で
あると論じている。古典主義とは違って、ロマン主義は、環境か
ら解放された質料を用いるのであり、ここに、革新が認められる
のである。

この観点からすれば、ロマン主義の根本的な革新は次の点
にあったと言えるだろう。すなわち、形式に対応する実質の
部分はもはやなく、コードに対応する環境ももはやなく、形
式のもとでコードによって秩序付けられる〔ordonnée〕に
至るカオスのなかの質料ももはやないということである。
(MP 419/中 379)

ロマン主義の芸術家あるいは一羽の鳥は、表現の質料を組み合
わせることで、関係性からなる表現によって、領土を構成する。

この組み合わせは、もはや質料から取りだされるコードでも、顔や古典主義者の形式すなわち規範主義的な形式でもなく、むしろ言語素論的な形式にあたるだろう⁽²⁶⁾。そして、表現の質料は、あらかじめコード化された実質のようなものではなく、そのような形式に対応して組み合わせられる質料なのであり、言語素論的な意味－質料と同様のものである。このような、特定の機能をもった組み合わせ、「アジャンスマン」に入ることで、顔や規範主義には閉じ込められない、質料の変性が解放されるのである。

このように、リトルネロあるいはロマン主義にあって、表現の質料としての質料は、コードや形式から解放されている。質料は、顔という実質（あるいは古典主義）においては、地層に囚われていたが、表現的になることで、質料は解放される。言語素論が意味－質料を、恒常性としての形式に対置することで定義し、可変的なものとみなしていたように、表現の質料もまた、同様の仕方でも可変性の質料になるのである。しかしながら、ドゥルーズ＝ガタリは、ここからさらに歩を進め、言語素論よりも一歩前へと踏みだしている。ドゥルーズ＝ガタリは、脱領土化された質料という、「物質」(le matériau) の思考へと向かうのである。

4. 物質の理論

あらためて論点を確認しておこう。本稿ではまず、言語素論の分析手続きが、関係性により定義される形式を記述するということと、その抽象主義が、意味－質料という可変性を発見したことを確認した。ついで、顔が、冗長性ととも実質としてつくられることで、あらゆる質料が顔として形式化され、地層に閉じ込められ、その可変性が押し殺されてしまうことをみた。そして、顔のように質料を地層に閉じ込めるのではなく、質料の可変性を解放するような運動が、領土化においてはたらいっていることを示した。本節では、ここからさらに、脱領土化した質料にかんする記述を読解し、そのうえで、意味－質料概念にあらためて引きつけ、ドゥルーズ＝ガタリの独創性について考察したい。

4-1. 脱領土化した質料、あるいは存立性について

記述のとおり、ドゥルーズ＝ガタリは、領土化における、質料の脱コード化を論じている。領土化がなされるという「架空の瞬間」での質料の解放である。だが、ドゥルーズ＝ガタリの質料論は、さらなる一歩を踏みだしており、アジャンスマンからアジャンスマンへの移行の成分としてはたらく質料、脱領土化の成分としての質料について論じている。たとえば、草の切れ端は、表現の質料として組み合わせられることで鳥の巣を構成するのであり、領土のアジャンスマンの意味－質料となる。しかしそれだけでなく、鳥の巣が求愛の機能をもつこともあり、そのとき、草の

切れ端という「全く同じ「もの」[chose]」(MP 402/中 351)が、求愛のアジャンスマンの質料になるとも考えられる。つまり、草の切れ端は、言語素論的な意味－質料のようにさまざまな形式を実現しうることこそ、異質なアジャンスマンに共通する質料になりうるのである。そして、別の角度から言えば、「[……]「草の切れ端」という表現の質料は、領土のアジャンスマンと求愛のアジャンスマンのあいだの移行の成分としてはたらいっている」(MP 399/中 347) ののである。この質料は、先にみた脱コード化した質料とは区別される、脱領土化した質料である⁽²⁷⁾。

脱領土化した質料は、「物質」と呼ばれ、あるアジャンスマンから別のアジャンスマンに移行するときに(脱領土化し再領土化するときに)、異なるアジャンスマンの成分に共通するものと考えられる。重要なのは、ある物質が、どのアジャンスマンに属するかによって、表現の質料としての身分を変えるが、それとしては、その両方に属しうるということである。したがって、移行の成分としてはたらく脱領土化した質料すなわち物質においては、異質な表現の質料(領土を表現する質料と求愛を表現する質料)が存立するのである。あるいは、異質な表現の質料同士が存立するときに、この物質があると言えるのである。

物質とは、このように、どのアジャンスマンにも入りうる質料のことであり、そのかぎりでは言語素論的な意味－質料と近いものなのだが、『千のプラトー』では、その「存立性」(consistance)が重要視されている。ドゥルーズ＝ガタリは、古典主義とロマン主義に続く近代にとっての務めとは、物質の存立性を高めることであるとさえ論じている。

もはや質料に形式を押し付けることは重要ではなく、ある物質を、ますます豊かに、ますます存立的に練りあげることが、したがってますます度外れたいくつもの力を捕獲できるように練りあげることが重要なのだ。物質をますます豊かにするものとは、異質であることをやめさせずに、異質なものの総体を維持させるものである。(MP 406/中 356)

存立性は必然的に、異質なもの同士のあいだでつくられる。すなわち、異化＝分化の起点があるからではなく、共存することや継起することに甘んじていた異質なものが、それらの共存と継起の「強化」によって、いまや互いが互いのなかでとらえられるためである。(MP 407/中 359)

ドゥルーズ＝ガタリが論じるように、「物質とは分子状になった質料のことであり、その意味ではいくつもの力を「捕獲」しなければならぬ[……]」(MP 422/中 384)ののだが、分子状になっ

た存立性の質料とは、決して、未規定なものではない。というのも、存立させられる表現の質料は、あくまでも具体的な機能を実現するものであるし、それらは互いに区別可能なままに存立されるためである。つまり、近代において作られなければならない脱領土化した物質、存立性の物質とは、異質な齟齬するものを総合するのであり、「ファジー集合」により規定されるのである（たとえば、草の切れ端と、領土の質料と求愛の質料というファジー集合）。重要なのは、「子どもの図画」や「狂人の文章」、「雑音のコンサート」（MP 424/中 387）のように、度を越して余分なものを付け加えることではない。「豊かすぎる物質は、過度に「領土化」され、雑音の発信源や事物の性質につながとめられる……（ケージのプリペアド・ピアノですらこのケースに相当する）」（MP 424/中 387）と言われるように、表現の質料になりうる質を増やし、要素同士の組み合わせを複雑にすることや、質料が持つ物理的な質を増やすことは問題ではない。それでは、領土化やコード化を進めることにしかならないだろう。

というのも、本質的なのは次のことだからである。すなわち、ファジー集合を規定し、齟齬するものの総合を規定するのは、ファジー集合を構成する雑多な要素の明確な区別（識別可能性）を可能にする存立性の度合い以外のものではありえない。物質は分子状になるだけ脱領土化されていなければならないし、統計学的な堆積に再び陥るのではなく、宇宙的なものへと開かれていなければならない。（MP 424-425/中 387-388）

このように、カオスから環境を構成する運動と、環境から領土を構成する運動に続いて、質料が地層からも領土からも解放される運動が辿られる。この解放の運動は、質料を未規定で無秩序なものにするのではなく、そのようなものに関わるのではなく、さまざまなアジャンスマン、すなわちさまざまな組み合わせに関わるとともに、異質な要素の存立をもたらす。言語素論が論じるように、十分に抽象的に思考され、その可変性が解放されるのなら、質料はそのままで、あらゆる形式のための質料になるのであり、〈宇宙＝普遍的秩序〉（Cosmos）へと開かれるのである。

4-2. 系統流と冶金術、あるいは表現特徴と特徴線について

ドゥルーズ＝ガタリは、半ば必然的に実質になってしまう周期性をもつカオスから出発して、二つの特殊な質料に到達する。表現の質料と、脱領土化した分子状の質料である。この二つの質料は、第十二プラトー「一二二七年——遊牧論あるいは戦争機械」で、新たな二つの概念としてさらに鑄なおされている。すなわち、

「表現特徴」（traits d'expression）をもち、「運動－質料」（MP 638/下 319）と呼ばれる「系統流」（phylum）と、互いに存立することで「存立平面」を構成する「器官なき身体」である。『千のプラトー』における質料の理論について、より考察を進めるために、おおまかに整理しておこう。

第十二プラトーで、ドゥルーズ＝ガタリは、ある技術的要素が道具としても武器としても用いられうることに着目し、道具と武器の差異が何に起因するのかを問うている。そして、その差異が、アジャンスマンの差異に由来すると論じ、国家装置と戦争機械という二つのアジャンスマンを区別している⁽²⁸⁾。したがって、このプラトーの最大の関心は、二つのタイプのアジャンスマンの記述に向けられているのだが、それと同時に、アジャンスマンに応じて、その性格や用いられ方が規定される「技術的要素」にも多くの記述が割かれている。たとえば、次のような記述がある。

ところで、諸々のアジャンスマンに出入りする、この運動－質料、エネルギー－質料、流れ－質料、変化している質料を、どのように定義すればよいのだろうか。それは、脱地層化し、脱領土化した質料である。（MP 507/下 121）

この引用に明らかなように、第十二プラトーでも、リトルネ口論と同様に、脱領土化した物質（あるいは移行の成分）に関心が向いている。第十二プラトーに特徴的なのは、脱領土化した物質が、表現特徴や系統流といった新しい概念とともに捉えなおされ、物質とその変化が理論化されていることにある⁽²⁹⁾。

ここで、刀という技術的要素を例にとり、表現特徴や系統流について考えてみたい。刀は、玉鋼に鍛錬や焼き入れといった複数の工程を含む一連の操作によってかたちづくられる。ある素材が、いくつかの変形の過程を経て延長されることで、硬さや切れ味の鋭さ、刃文といった表現特徴をもつようになるのである。ドゥルーズ＝ガタリが系統流と呼ぶのは、玉鋼から刀へと延長される連続体のことであり、系統流には、ある時間－空間的な特殊性（鍛錬の工程）から別の特殊性（焼き入れの工程）へと延長する操作と、それらの特殊性が収束していく表現特徴がみだされる⁽³⁰⁾。したがって、鉄剣と刀は、異なる系統流に属するのであり、それぞれに異なる特殊性と操作、表現特徴が認められるのである。

このように、刀は、玉鋼という物質の変形の過程や、切れ味や刃文といった表現特徴から切り離せない⁽³¹⁾。ドゥルーズ＝ガタリは、変形の過程や表現特徴といった物質の本質を、フッサールを参照して、「漠然とした本質」（essence vague）と呼んでいる。これはたとえば、円（知性的な形式的本質）や丸いもの（感覚的

事物性)からは区別される、「丸」のことであり、これにしたがってファジー集合が構成される(車輪、太陽、花瓶も同様のファジー集合をつくる)⁽³²⁾。このことに鑑みれば、たとえば、刀は、(切れ味の)鋭さや(刃文の)波模様などのファジー集合をつくると言えるだろう(同様に、鉄剣や包丁、釉薬により彩られた花瓶も波模様のファジー集合をつくると言えるだろう)。だからこそ、刀は、武器としてだけでなく美術品としても扱われるのであるが、その扱われ方を決定するのは、アジャンスマンである。つまり、アジャンスマンは、技術的要素から表現特徴を選択して取りだし、この要素の機能を決定するのである(これは、草の切れ端が、領土や求愛のアジャンスマンに属することで、異なる機能を実現することに相当する)。そして、今度はアジャンスマンの方が、技術的要素がもつ特定の表現特徴から出発して、新たな系統流をつくることもあるだろう(武器ではなく、美術品や神器としての表現特徴をもつ系統流の発明)。このとき、刀は、玉鋼-短刀-刀のような系統流と、玉鋼-刀-美術品のような系統流の、異質な二つの系統流に属し、なおかつ、それらを発散させる地帯になっていると考えられるのである(いくつかの表現特徴をもつ系統流が、別の表現特徴に収束する系統流に分岐すること)。

このように、物質を変形させ、系統流をつくる操作の学は、マイナー科学や遊牧科学、「冶金術」と呼ばれている。これは、冶金術が金属に対してそうするように、物質のなかのいくつかの表現特徴に着目し、変形することで、新たな物質をつくりだすことの謂いである。とりわけ興味深いのは、ドゥルーズ=ガタリが、冶金術の扱う金属を「器官なき身体」と呼んでいることである(MP 495/下 103)。つまり、器官なき身体とは、物質のことなのであり、そこからさまざまな系統流が作りだされるのである。器官なき身体は、アジャンスマンに関係づけられることで、いくつかの表現特徴が選別され、具体的に規定されるため、系統流や表現の質料とは身分を異にするのだが、たんにそれだけでは、「未規定にとどまる」⁽³³⁾ため、なにものでもない。器官なき身体は、砂漠に描かれる風紋のような、たちまち消え去るがたしかに識別される「特徴線 [traits]」(MP 472/下 71)をもつに過ぎず、そこから、冶金術がいくつかの表現特徴を選び取ってくるのである⁽³⁴⁾。

5. 器官なき身体と此性

このように、リトルネ口論で拓かれた物質の理論は、冶金術論に引き継がれ、さらに精緻化されている。ドゥルーズ=ガタリは、いくつかの選別された表現特徴をもち、系統流をなし、アジャンスマンに入る質料と、特徴線をもつ物質、器官なき身体を区別して、提示してみせるのである。ところで、言語素論にしたがうな

ら、特定の関係性としての形式を実現するのが、ほかならない意味-質料と呼ばれているのであった。この定義に鑑みるなら、アジャンスマンに入り、特定の表現特徴を選別された質料、すなわち表現の質料は、言語素論の意味-質料に相当する。まさに、表現の質料という呼び方が、意味-質料という用語の二重性を反映しているのである⁽³⁵⁾。つまり、すでに指摘したとおり、言語素論的に言えば、この時点で質料の可変性は解放されているのである。したがって、特徴線や器官なき身体は、ドゥルーズ=ガタリが言語素論以上に質料の理論を徹底したことの帰結であると言えるだろう。言語素論の意味-質料概念は、そのポテンシャルにおいて器官なき身体概念の萌芽を含んでいたが、ドゥルーズ=ガタリがはじめてそれを展開してみせたのである⁽³⁶⁾。

それでは、ドゥルーズ=ガタリは、何のために、意味-質料を器官なき身体へと鍛えなおしたのだろうか。イェルムスレウ以上に言語素論を徹底したことで、何がもたらされるのだろうか。いくつかの解釈は可能であるだろうが、器官なき身体によって、「此性」(heccéité)までを射程に含んだ理論が可能になっているように思われる。本稿では最後に、もう一度言語素論的な議論へと送り返すことで、質料の理論と此性について考察を深めたい。

5-1. 意味-質料から器官なき身体へ、あるいは此性と逃走線について

前節の繰り返しになるところもあるが、一本の線の変形について考えてみよう⁽³⁷⁾。線は、曲げられたり、別の線が付加されたりするなど、操作されて変形の過程を辿る。そして、その線は、それらの操作が収束する表現特徴をそなえた連続体を形成する。この綴り字的な連続体は、ある言語の表現形式の体系(要素の組み合わせ可能性、アジャンスマン)に関係づけられることで、意味-質料としての身分をもち、その表現特徴のいくつかを選別されることになる。たとえば、英語は、組み合わせ可能性により定義される書記的な形式の数だけの、相互に区別される表現特徴と、その特徴に対応する変形の操作を選別する。こうして、ひと続きに綴られた筆記体の連続体が、「a」から「z」の表現特徴をもつようになり、表現特徴「a」をもつ物質は、形式「a」を実現する意味-質料とみなされるようになる。そして、「b」などの表現特徴をもつ物質と混同されない範囲であれば、さまざまな仕方でも「a」を書き、変形することができる。このように、ある形式の体系(アジャンスマン)に対応した表現特徴や操作をもつ連続体、系統流が形成されるのであり、これが、「運動-質料」や「連続変化」の謂いにほかならない。おそらく、この時点では、ドゥルーズ=ガタリの解釈は、イェルムスレウの理解していた意味-質料概念の射程を超えるものではないだろう。

ドゥルーズ＝ガタリの独創的な読解が発揮されはじめるのは、既述のとおり、意味－質料が、存立性の物質や器官なき身体として記述されるときである。すなわち、物質「a」が、異なる表現特徴を存立させるときである。たとえば、物質「a」は、英語ではなくフランス語の形式に対応する意味－質料にもなり、別の綴り字の連続体(系統流)を構成するとも考えられる。そうであるなら、「à」のような物質は、英語ではそれに対応する形式がないため、表現特徴「a」をもつ意味－質料とみなされるだろうが、フランス語では、書記的形式「à」にとっての意味－質料として、つまり表現特徴「à」をもつ意味－質料とみなされるだろう。したがって、英語の表現特徴「a」とそれが属する連続体は、フランス語の表現特徴「a」とそれが属する連続体と同じではなく、物質「à」の身分も、それがどの言語に関係づけられ、どの綴り字の連続体に関係づけられるかで異なるのである。ここで理解されるが、「à」という物質からは英語にとっての表現特徴「a」やフランス語にとっての表現特徴「à」が取りだされるし、この物質「à」は、いくつかの表現特徴や意味－質料を存立させるが、それらの特徴や意味－質料に還元されることはない⁽³⁸⁾。ドゥルーズ＝ガタリは、選別された表現特徴に還元されない特徴線を持ち、特定の意味－質料にはならないかぎり、存立性の物質を脱領土化した物質や器官なき身体と呼んでいる。この論点は、イェルムスレウにも考えることができただろうが、少なくとも明示的には語られることのなかったものであり、これを引きだしたことに、ドゥルーズ＝ガタリの意味－質料解釈の独創性があると言えるだろう。

このように、ある物質すなわち特徴線は、特定の表現特徴に尽くされないため、たとえば、特徴線「à」を崩して書いた日本語の「お」とみなすことで、表現特徴「お」を抽出し、その表現特徴をもつ要素の集合を形成することでさえ可能である(英語の「a」、フランス語の「a」、日本語の「お」のファジー集合)⁽³⁹⁾。しかしそれだけでなく、ある特徴線が、他の特徴線と存立しているということもできるだろう。特徴線は、あくまでもそこから取りだされる表現特徴なしには、特定の単位をなさないため、それ自体でひとつの単位をなしているとは言えないのである(たとえば、その表現特徴と変形の操作を知らないままに、速記文字を目の前にすることを考えてみればよい)。だからこそ、ひとつの特徴線とみなされていたもののなかに、発散する複数の表現特徴をみだし、それらの特徴をもつ複数の特徴線をみだすこともできる⁽⁴⁰⁾。

たとえば、物質「à」は、「à」や「a」、「お」などの表現特徴をもち、フランス語や英語や日本語の綴り字的な意味－質料の連続体(系統流)に属しうるが、物質「à」をひとつの単位とみなす必然性はない。そのため、物質「à」に、縦書きにされた表現特徴

「し」「の」をみだし、特徴線「し」と「の」が存立していると言うこともできる。つまり、ある単位は、たしかに識別できるが、分節されているために、絶対的な単位として数えあげることができない⁽⁴¹⁾。だからこそ、特徴線－器官なき身体は、「分子状」や「なんらかの度合いをもって空間を占める質料」(MP 189/上 314)と形容されるのであり、「此性」(MP 632/下 310)と言われるほかない⁽⁴²⁾。英語の意味－質料「a」が表現特徴「a」の範囲内で連続的に変形し運動するのに対して、特徴線－器官なき身体は、そうした運動を可能にするものでありながら、それ自体は動かずに、空間を占めるのみである(器官なき身体を金属として扱い、連続変化の状態に置くことで質料として準備する冶金術と、それとしては動くことのない遊牧的な特徴線)。また、特徴線－器官なき身体は、異質な表現特徴を存立させるが、それ自体、いくつもの特徴線を「齟齬するもの」(MP 632/下 310)として総合するものでもある(存立平面「à」の上で存立する雑多な器官なき身体「`」と「a」)。したがって、特徴線－器官なき身体は、そこから取りだされるいくつかの表現特徴には尽くされないし、そもそもひとつの特徴線とみなすことも不可能である⁽⁴³⁾。つまり、特徴線－器官なき身体は、意味－質料になることがなく、地層化の運動に捕らわれはじめるやいなや、ただちに「逃走線」を引き始め、「抽象的な線」⁽⁴⁴⁾になってしまうのである。ドゥルーズ＝ガタリは、意味－質料の可変性を徹底化することで、もはや地層化されず、そこからいかなる恒常性も取りだされないような器官なき身体という物質を思考するに至るのである。そうして、「あらゆるエクリチュールの線」(MP 229/中 52)が、逃走線を引きはじめる。

5-2. いかにして器官なき身体をつくりあげるか、あるいは中間について

このように、複雑な概念布置を踏まえれば、器官なき身体の変性が、さまざまな変化をもたらすということができる。特徴線は、ある表現特徴から別の表現特徴への移行を可能にし(英語にとっての「a」からフランス語にとっての「a」へ)、つねに「中間」でみだされるものである(Cf. MP 632-633/下 310-311)。そして、表現特徴の選別がアジャンスマンを前提にしている以上、ある表現特徴から別の表現特徴への移行を可能にする「中間」は、前提とされるアジャンスマンの間の移行をもたらすものでもある(英語にとっての系統流とアルファベットの体系から、フランス語にとっての系統流とアルファベットの体系へ)。こうして、特徴線が逃走線に転じ、ある器官なき身体が複数の器官なき身体を存立させる存立平面とみなされるとき、新たに得られる特徴線や表現特徴は、それに対応するアジャンスマンの発明をも促すだ

ろう⁽⁴⁵⁾。器官なき身体という物質は、さまざまな変化をもたらす「中間」なのである。

ところで、見方を変えれば、特徴線は、つねに前提されるものであり、「はじめ」⁽⁴⁶⁾から存在しているとも考えることもできる。これは、いわば、アジャンスマンとの関係や存立性なしに、したがって選別された表現特徴なしに存在する物質のことと考えられるだろう。つまり、「中間」や移行の物質ではなく、あらゆる連結や規定とは無関係な器官なき身体がありうるのである。それでは、あらゆる形式や表現特徴を経るのでなければ、どのようにして、このような器官なき身体をつくりあげられるのだろうか。それは、おそらく、あらゆる具体的なコードや形式、表現特徴を捨て去ることによってであろう。しかしながら、そのように、「はじめ」からある器官なき身体に辿りつこうとする試みは、空虚な器官なき身体を得る結果にしかならないだろう⁽⁴⁷⁾。ドゥルーズ＝ガタリが度々注意を促すのは、そのような仕方での器官なき身体への接近である。続けて引用しよう。

強度が通うに足るだけ豊かな、充溢した器官なき身体をつくる代わりに、麻薬は、空っぽな、ガラス化した身体を、あるいはがんの身体をつくりあげる。(MP 349/中 261)

麻薬常習者の誤りは、中継地点〔relais〕をとり、「中間へ」出発し、中間で分岐すべきなのに、麻薬をやるためであれ、あるいは麻薬を放棄するためであれ、その都度ゼロからやりなおすということなのだろうか。酔っぱらうこと、しかしただの水で（ヘンリー・ミラー）。麻薬中毒になること、ただし差し控えることで。「麻薬をやり、麻薬を断つこと、とりわけ断薬すること」。わたしは水飲みなのだ（ミショー）。もはや「麻薬をやるか否か」が問題にならない地点に辿り着くこと。そうではなく、麻薬が空間と時間の知覚にかかわる一般的な条件を十分に变化させたからこそ、麻薬常習者以外の人間が、麻薬以外の手段を必要とするまさにその場所で、世界に穿たれた穴を通り抜け、逃走線上に移行してみせるのだ。麻薬が内在性を保証するのではないが、麻薬の内在性があればこそ、それなしで済むのである。〔……〕水の分子、あるいは水素の分子、ヘリウム分子など、適切な分子を選択し、選別する必要があるのだ。(MP 350/中 263)

ゼロからやりなおそうとすることでは、空虚な器官なき身体し得られない。たとえ、そうして、空っぽの身体が得られたとしても、器官なき身体はただちに逃走線を引いて、逃れ去ってしまうだろう。特徴線がその可変性ゆえに捕らえられなかったことか

ら理解されるとおり、器官なき身体は、知覚を逃れる知覚しえぬものなのであり、それにもかかわらず、知覚するべきものである。そして、それに生きて到達するためには、コードや形式、アジャンスマンをとおして、自らの身体を分子状にすることで、中間を、存立性の物質を、すなわち器官なき身体をその都度作りあげるのでなければならない。形式や表現特徴を絶えず放棄するという方法では、逃走線は死への線になってしまう。

ミショーは言う。きみたちは、もはや自分の速度の支配者ではないだろう。きみたちは、知覚しえぬものと知覚のレースに入っていく。しかもこのレースは、すべてが相対的であるだけになおのこと堂々巡りなのだ。きみたちはきみたち自身で膨れあがり、みずからの制御を失ってしまう。きみたちも存立平面の上に、器官なき身体のなかにありはするだろう。しかしきみたちは、存立平面と器官なき身体をとらえそこない、それを空っぽにし、きみたちがつくりあげたものを、動かないぼろくずを壊し続けるようなところにいるのだ。
(MP 349/中 261-262)

したがって、器官なき身体とは、いわば端的な質料、物質のことではあるが、それをつくりあげるための方法は簡単なものではありえない。本稿がみたように、言語素論のように、形式の抽象化を徹底的に推し進め、ある物質がもつ特徴を見極めなければならない。そうしなければ、規範を質料に適用することになってしまうし、物質の可変性を解放することはできない。そして、そうでなければ、ある物質が、中間や存立性の物質として生成変化を導くこともないだろう⁽⁴⁸⁾。その可変性は、地層の内部にある絶対的な〈外〉となり、偶然性を操作することで、連結をもたらすのである⁽⁴⁹⁾。

おわりに

本稿では、質料をめぐる、地層化の運動や脱地層化の運動を中心に、『千のプラトー』の議論を再構成しようと試みた。本稿の考察は、言語素論の意味－質料概念から出発して、冗長性や顔、表現の質料や系統流、そして器官なき身体といった概念に辿りついた。こうして理解されたのは、ドゥルーズ＝ガタリが、イェルムスレウが提示した意味－質料概念を評価し、それを独自の概念に練りあげているということ、そのためにこれほど多くの概念が用いられているということである。言語素論のような、抽象的な分析を行う思考だけが、質料の可変性を、つまり端的な物質を記述することができる。ドゥルーズ＝ガタリは、イェルムスレウの思考を再開し、この物質がもつポテンシャルを示してみせたので

ある。

このように、質料を端的な仕方ですべて記述するためには、抽象的な思考が求められる。「a」という物質をそのままに捉えようとするとき、思考は徹底的な抽象化に駆りだされる。その果てに思考される器官なき身体は、端的な質料であるはずが、きわめて抽象的

なものになっている。思考と質料が接近していき、一方が他方に、他方が一方に生成変化する。「a」の此性は、思考と物質が識別不可能になる地帯にある。そこで、思考と物質が、「と」へと生成変化するのである。

略号一覧

* ドゥルーズおよびドゥルーズ=ガタリの著作への参照には、以下の略号を用い、原文／邦訳の順で頁数を指示している。なお、引用に際しては邦訳を参考にしたが、変更した箇所もある。また、〔 〕内は引用者による。

MP : Gilles Deleuze et Félix Guattari, *Mille Plateaux: Capitalisme et schizophrénie 2*, Minuit, 1980. (『千のプラトーーー資本主義と分裂症』上中下巻、宇野邦一・小沢秋広・田中敏彦・豊崎光一・宮林寛・守中高明訳、河出文庫、2010年)

IT : *Cinéma 2. L'image-temps*, Minuit, 1985. (『シネマ2 * 時間イメージ』宇野邦一・石原陽一郎・江澤健一郎・大原理志・岡村民夫訳、法政大学出版局、2006年)

註

1. Oswald Ducrot, Tzvetan Todorov, Dan Sperber, François Wahl (ed.) *Qu'est-ce que la structuralisme?*, Le Seuil, 1968, p. 69. (『構造主義 : 言語学・詩学・人類学・精神分析学・哲学』渡辺一民、井村順一、松崎芳隆、伊藤晃、佐々木明訳、筑摩書房、1978年、65頁)
2. *Ibid.*, p. 71. (同上、66頁)
3. 誤解を招かないように言えば、言語素論が形式をこのように定義するからといって、個々の言語使用に関心を払わないわけではない。たとえば、言語素論では、方言や俚言、作家の文体なども分析の対象になる。詳しくは、セミル・バディル『イェルムスレウ』町田健訳、研究社、2004年を参照されたいが、共示分析という手続きによって、こうした特徴的な言語使用が分析されることになる。
4. Louis Hjelmslev, *Prolégomènes à une théorie du langage*, traduit par Anne-Marie Leonard, Minuit, 1968, p. 15. (『言語理論の確立をめぐる』竹内考次訳、岩波書店、1985年、7頁)
5. たとえば、次の記述を参照されたい。「このようにフランス語の r は、対立的で関係的でネガティブな実体として定義される。特定の定義は、それがどのようなものであれ、いかなるポジティブな質も r に帰属させることがないのである。この定義が含むのは、r が実現されるものであるということであって、それが実現されたものではないということである。この定義は、どのような表出の余地でも残したままにする」(Louis Hjelmslev, « Langue et parole », dans *Éssais linguistiques*, Minuit, 1971, p. 81)。
6. Louis Hjelmslev, *Le langage*, traduit par Michel Olsen, Minuit, 1966, p. 64. (『言語学入門』下宮忠雄・家村睦夫訳、紀伊国屋書店、1968年、56頁)
7. Cf. Louis Hjelmslev, « Langue et parole », p. 80.
8. Cf. *Ibid.*, p. 87.
9. Cf. *Ibid.*
10. Louis Hjelmslev, *Prolégomènes à une théorie du langage*, p. 79. (『言語理論の確立をめぐる』、72頁)
11. 正確に言えば、「sens-matière」は、デンマーク語の「mening」という語の訳語である(なお、英語では「purport」である)。この訳語は、フランス語には表現と内容の両面を考慮できる語がないため、その二重性を表すために用いられているが、本論で示すとおり、ドゥルーズ=ガタリの思考にとってはかえって適当な訳語であるかもしれない。なお、後年のイェルムスレウは、このような訳を自ら改めて、単に「matière」としている(Cf. Louis Hjelmslev, « Stratification du langage

», dans *Essais linguistiques*, Minuit, 1971, p. 58)。

12. グレゴリー・ベイトソン『精神の生態学』下巻、佐藤良明・高橋和久訳、思索社、1987年、597頁。
13. 同上。
14. 第四プラトーでは、指令語の冗長性について論じられているが、そこでは、一般的な冗長性のようなノイズと情報の対立ではなく、言語にはたらきかける不規則性と文法性の対立が論じられている (MP 100-101/上 172)。ここでの文法性とは、たとえば男性-女性、単数-複数のような、「文法の対的基礎 [bases duelles de la grammaire]」 (MP 95/上 165) のことであり、それに服従させるという論点は、支配的現実 (言表) への服従化=主体化にそのまま対応すると言える。なお、こうした文法性を取りだすための方法として、定数と定常的な関係を取りだすことが挙げられ (MP 130/上 215)、換入テストによって恒常素 (音韻論的恒常素など) を取りだすことや、言語活動の普遍的特性 (音素から弁別特徴) を取りだすことが批判されているのだが (MP 116/上 195)、あくまでも、ここで批判されているのは、言語素論的な恒常性すなわち形式ではなく、チョムスキー的な規範であることに注意されたい。ドゥルーズ=ガタリによる、言語素論の形式概念の位置づけについては、拙論『千のプラトー』における抽象機械の理論について——イェルムスレウの言語素論における言語図式に着目した考察』、『共生学ジャーナル』第三号、2019年を参照されたい。
15. André Martinet, *La linguistique, Guide alphabétique*, Denoël, 1969, p. 331. (『言語学事典——現代言語学基本概念 51章』三宅徳嘉監訳、大修館書店、1972年、200頁)
16. Cf. *Ibid.* (同上)
17. *Ibid.*, p. 332. (同上、200頁)
18. 以下にみるが、これは、頻度によりみだされるような、形式化され地層に取りこまれた意味-質料、すなわち実質が、そのまま主体に転写されるということである。つまり、「よく言われるとおり、実質は主体になったのである」(MP 162/上 267)。
19. グレゴリー・ベイトソン『精神の生態学』下巻、599頁。
20. これは、『千のプラトー』の射程を意図的に制限するものであるため、この著作のねらいと豊饒さを多少なりとも損なってしまうだろう。しかしながら、すでにみたように、冗長性の二つの形式が言語学の議論をもとにしていることや、第四プラトーで論じられる「指令語=整理の言葉」(mot d'ordre) が、まさに言語的な規則 (文法や音素など) とその適応、それへの服従化を問題にしていることに鑑みれば、『千のプラトー』読解の糸口が得られるとも考えられる。詳論はできないが、本稿の理解にもとづいて第四プラトーを整理すれば次のように言えるだろう。指令語=整理の言葉は、あるアジャンスマンに、ある質料を組み入れるものであるが、そのとき、それまで属していたアジャンスマンからの移行が生じているとも考えられる。つまり、ひとつの質料は、否定的な脱領土化と再領土化を経るわけだが、その脱領土化の絶対性において、物質としての存立性が高められているとも考えられる。指令語による非身体的変形は、ひとつの身体を脱領土化し再領土化し、それまでの特徴とは異なる特徴を取りだし、結局はそのなかに身体を閉じ込めてしまうとしても、その最中で、「移行」(passage) の成分としての器官なき身体を解放してもいるのである (Cf. MP 110-111/上 185-186; 138/上 226-227)。ドゥルーズ=ガタリの狙いは、こうした移行の成分を解放すること、つまり、どのアジャンスマンにも属しうるだけでなく、意味-質料と言われるように、表現と内容の両方に属しうるような物質を解放することにある。
21. 測定すべき単位の設定は、おそらく否定することは難しく、また、分析としての整合性を担保するためにも、はじめに設定された単位を暫定的にみとめたうえで、分析を進めることも否定はされないであろう。ここでの問題は、規範を抽出することと、それを適合していくことにある。単位を設定するために、恣意的な仕方では物理的な質は選択されるが、第三節以下で論じるとおり、着目すべき特徴は、分析が前提にするアジャンスマンごとに異なるのであり、特定の特徴の特権視は避けられなければならない。言語素論の共示分析は、こうした考えと親和的であるだろう。だが、本稿で最終的に示すとおり、ドゥルーズ=ガタリが最重要視するのは、意味-質料からなんらかの恒常性を取りだすことでなく、可変性が引く逃走線である。
22. したがって、冗長性の論理を徹底することで、脱地層化の運動が導けるのである。1960年代ドゥルーズの著作で、現働化の運動とそこから潜在的なものを回復させる操作が別の論理で考えられていたことに鑑みれば、『千のプラトー』の哲学体系には大きな転回がなされていることが分かる。つまり、対象を同定=同一化する「表象」に取って代わる新たな論理が提出されているのである。

23. したがって、小倉拓也『カオスに抗する闘い—ドゥルーズ・精神分析・現象学』人文書院、2018年で主題化される『哲学とは何か』のカオスとは少なからず異なるものと考えられる。もちろん、『千のプラトー』でも崩壊という契機や死は問題にされているが、払いのけるべき喫緊の課題としては論じられていないように思われる。そうであれば、『千のプラトー』と『哲学とは何か』では、リトルネロや芸術に託された意義が大きく異なるのかもしれない。それは、『カオスに抗する闘い』で指摘されるような、「古い」の全面化という観点から検討することができるだろう。あるいは、『千のプラトー』では、芸術による救済が退けられていることに鑑みれば、この著作に特有の実践の可能性を示すことができるかもしれない (Cf. MP 227/中 50)。
24. しかしながら実際には、宇宙的なものの時代におけるリトルネロもあることに注意されたい。大まかに言えば、ロマン主義のリトルネロでは、表現の質料同士がアジャンスマンのなかでもつ存立性が問題になっており、宇宙的なものの時代のリトルネロでは、齟齬するもの同士の存立性が問題になっていると考えられるだろう。おそらくこれは、抽象機械の「統合態」(œcumène) と「平面態」(planomène) の区別に重なっている。
25. 「架空の瞬間」であるとしても、この書き方はミス・リーディングであるように思える (これは、分子状の質料である「移行の成分」にかんしても言えることである)。注意しなければならないが、表現の質料が成立するのは、環境に由来する質料が組み合わせられ、それが領土をなす瞬間であるため、表現の質料がそれだけで取りだされるわけではない。表現の質料は、組み合わせられることでしか解放されず、それは領土の成分になるのと同時的である。また、表現の質料が自由だからといって、それが未規定なわけではない。それはある種のコードをもつだろうし、たとえばスキノピーティスが用いる表現の質料は、知覚され識別され選択されるだけの「表現の質」をもっている (Cf. MP 387/中 326 ; MP 410/中 363)。本稿の考えでは、表現の質は、本稿の第四節でも取りあげる、表現特徴として捉えなおされるものである。
26. ここで言われる形式は、なんらかの機能を担うものである。なお、ドゥルーズ＝ガタリが芸術における「模範的な形式」として示すのは、リストにみいだされるような「音の風景」や「メロディーの風景」、ワーグナーにみいだされるような「リズムの人物」である (MP 393/中 336)。
27. これは、存立性の観点から整理することができる。つまり、領土化においては、質料同士がアジャンスマンに対応する内的な関係をもつこと、そのかぎりでの存立性が問題になっていたが、ここでは、あるアジャンスマンと他のアジャンスマンに共通してみいだされるが、等質的ではない質料の存立が言われているのである。「存立性の問題は、たしかに、領土的アジャンスマンの成分が統一〔ensemble〕を維持する仕方に関係している。しかしながらこの問題は、異なるアジャンスマンが、移行と中継〔relais〕の成分によって、維持される仕方にも関係している」(MP 403/中 352)。
28. たとえば、次の記述を参照されたい。「系統流が、技術的要素を選別したり、質を与えたり、発明しさえするのは、いくつものアジャンスマンという仲介によってである。したがって、武器や道具がそのなかに組み込まれていき、また前提にもしているアジャンスマンを定義しなければ、それらについて語ることはできない。この意味で、われわれは、武器と道具は外的な仕方だけで区別されるわけではないが、だからといって、内的な弁別特徴をもつわけでもない、と言ったのである」(MP 495/下 103)。
29. 第十一プラトーでは、リトルネロにとって範例的な芸術として音楽が挙げられつつ、アジャンスマンとその成分である表現の質料が議論されていた。そして、その要点は、形式の抽象度が上がれば、それに比例するように質料も脱地層化、脱領土化するというところにあった。これに対して、第十二プラトーのマイナー科学で論じられるのは、音楽ではなく冶金術である。ここでは、物質の解放が主に論じられているのだが、「音楽家としての鍛冶屋」や「団体精神」といった、十一プラトーに補完的な議論もなされている (Cf. MP 510-512/下 127-129)。しかしながら、言語素論の観点に立てば、これらの区別は本質的なものではなく、相互に反転可能であると考えられる。
30. 次の決定的に重要な記述を参照されたい。「特異性の総体があり、それらの特異性が、いくつかの操作によって延長可能であり、ひとつないしいくつかの指定可能な表現特徴に収束し、またそれらの操作も収束させることがみいだされるときには、ひとつの機械状系統流、あるいはひとつの技術の系統〔lignée〕について語るることができる。もし特異性または操作が、いくつかの異なる物質においてあるいは同じ物質において発散するならば、二つの異なる系統流を区別しなければならない」(MP 505-506/下 119)。

31. 次の記述を参照されたい。「〔冶金術は二つの種類の物質的な変化を扱うが、その〕第一は、異なった秩序〔ordres〕の、時間－空間的特異性あるいは此性と、変形や変容の過程として、それらに結びつく操作であり、第二は、これらの特異性と操作に対応する、異なった水準の情動的質あるいは表現特徴である」(MP 505/下 118)。
32. ドゥルーズ＝ガタリはここで、デリダの『幾何学の起源』序説を指示しているのだが、デリダ自身は、『千のプラトー』における器官なき身体概念を批判している。小川歩人「非連続の筆致」、『Hyphen』第2号、2017年によれば、「未分化」な「連続体」をあまりにも軽率に導入した点で、器官なき身体は批判されている。この批判のすべてに応答できるわけではないが、本稿の考えでは、器官なき身体は決して未分化なものではないし、安易に前提される連続体というよりも、その都度つくりだされなければならない、齟齬するものの存立である。
33. 「しかしながら、すべてのテクノロジーにかんする原理は、ある技術的要素は、それが前提にしているアジャンスマンに関係づけられないかぎり、抽象的であり、まったくの未規定にとどまるということを示すことである」(MP 495/下 103)。
34. 物質から表現特徴を取り出すということは、地層化されない意味－質料あるいは器官なきという「反思考」に思考が辿りつくことでもある。ドゥルーズ＝ガタリは、このような思考のパス化を説明するために、アルトーのリヴィエール宛書簡を通じて、「ひとつの物質のなかのいくつかの表現特徴をただ引き立たせる」(MP 468/下 64-65) ことについて語っている。
35. たとえば、ドゥルーズ＝ガタリの次の記述を参照されたい。「表現の質料」という語そのものが、表現が質料と独特な関係をもつということを含意している」(MP 421/中 367)。
36. すなわち、分布主義のように、意味－質料を特定の形式を実現するだけの可変素＝変数として捉えるのではなく、それが単なる「統計学的な堆積」にならないように、意味－質料がもつ可変性を、その存立性ととも記述することが目指されているのである。
37. 本稿では、議論の構成上、アジャンスマンを含め、系統流概念も言語論的な事例として説明する。しかしながら、『千のプラトー』では記号と道具が内的な関係をもつと考えられているため、こうした例示は、実際には不適切であるかもしれない(Cf. MP 499/下 109)。
38. このほかに、観念内容の系統流を考えることもできる。たとえば、「都市」という観念は、「都会」や「街」、「村」などの観念と連続体をなすだろうが、そこからレアメタルが取りだせる「携帯電話」や「鉱石」、「鉱山」と連続体をなすとも考えることもできる。あるいは、都会での「通勤」が「トレッキング」と連続体をなすとも考えることもできるだろう。
39. このことから理解されるように、物質(可変性)からは、さまざまな規定性(恒常性)を取り出すことができる。このことから、ドゥルーズ＝ガタリは、条理化が、平滑空間を利用するあるいは必要とすると論じているのである(Cf. MP 617-618/下 288)。
40. たとえば、きわめて重要な次の記述を参照されたい。「一方の〔超越性の〕平面上では知覚されえないものが、もう一方の〔存立性の〕平面では知覚されるしかないということが、二つの平面の差異をなしている。そうであればこそ、一方の平面からもう一方の平面へ、あるいはいくつかの相対的な閾からそれらの閾と共存する絶対閾へと飛躍することで、知覚しえぬものが必然的に知覚されるにいたるのだ。〔……〕知覚はみずからの限界に直面するに至るだろう。知覚はもの〔choses〕のあいだに、みずからの近傍の全体のなかにある。ある此性が別の此性のなかに現前し、一方が他方によって捉えられ、あるいは一方から他方へと移行するように」(MP 345/中 254-255)。
41. たとえば、次の記述を参照されたい。「どれほど小さくても、「単位」は分節されている。数える数〔nombre nombrant〕は、つねに、同時にいくつもの基礎のうえに成り立っている」(MP 487/下 91)。
42. ドゥルーズ＝ガタリは、「経度と緯度としてのみみなされた身体」と「複数の経度と緯度が交錯する環境＝場」として、アジャンスマンの此性と相互的アジャンスマンの此性を区別している(MP 321/中 212)。この点に鑑みれば、本稿は前者を扱うものであり、拙論「ドゥルーズ(＝ガタリ)の哲学における不定冠詞論について――ギョーム言語論受容の観点にもとづいた此性にかんする考察」、『Hyphen』第三号、2018年は、後者を扱おうとした議論だと言えるだろう。
43. このような器官なき身体の汲みつくしえなさ、「クリナメン」や「最小の余剰」と呼ばれている(Cf. MP 459/下 51)。ドゥルーズ＝ガタリは、しばしば速度について語るが、これも同様の論点をなしている。「運動は、ある一点から他の一点に行くような、「ひとつ」とみなされる身体の相対的な性格を意味するのだが、これとは反対に、速度とは、物体の絶対的な性格で

あり、その身体の還元不可能な部分（アトム）は渦巻き状に平滑空間を占め、あるいは満たすのであり、任意の点に出現する可能性をもっている」（MP 473/下 72）。

44. 「実際に、エクリチュールが存在しないか、あるいはまだ少ししか存在していないか、または外部が隣接地域にたくさん存在するだけというときには、線はなおさら抽象的である。さまざまな帝国においてみられるように、エクリチュールが抽象化を引き受けるとき、すでに罷免された線は、必然的に具体的になっていき、また具象的〔figurative〕にさえなっていく。子供たちはもはや絵を描くことを知らない」（MP 620/下 292）。
45. 本稿の第二節に引き付けて言えば、ここでは、冗長性がきわめて低くなっていると考えられるだろう。顔や規範主義は、冗長性を高めていくが、それに対して、物質の存立性にあつては、異なるアジャンスマンと、それに属する異なる表現の質料が、いわば「非論理的に」（MP 632-633/下 310-311）連結されている。ドゥルーズ＝ガタリは、頻度と共鳴に続く冗長性の第三の形式として接続詞「と〔et〕」（MP 124/上 206）を提示しているが、まさに器官なき身体（また平面態）は、「と」としてはたらき、意外で非論理的な連結をなし、偶然性を呼び込むのである。
46. 「それでもやはり、抽象線は、〔具象的という〕もうひとつの極を形成しうるあらゆる線がつねに前提とする極であるかぎり、〔はじめ〔commencement〕〕にある」（MP 621/下 292）。
47. ドゥルーズ＝ガタリは、「いかにして器官なき身体はつくられるのか」という有名なプラトーンを書いているが、ここでまさに、器官なき身体をつくりあげる仕方が問題になるのである。「ところで、問いは多数である。いかにして CsO はつくられるのかという問いだけでなく、いかにしてそれに対応する強度を生産するのかという問いもあるのであって、それなしには CsO は空虚にとどまってしまうだろう。これは、まったくもって同じ問いなのではない。だがさらに、いかにして存立平面に至るのか、という問いもある。いかにして総体〔ensemble〕を縫い合わせ、冷却して、いかにしてあらゆる CsO をひとつにまとめるのか。それが可能であるのは、ひとつひとつの CsO の上で生産されるすべての強度を連結し、あらゆる強度の連続性からひとつの連続体をつくりあげることによってのみである。ひとつひとつの CsO を製造するためには、いくつものアジャンスマンが必要であり、存立平面を組み立てるには、ひとつの大きな〈抽象機械〉が必要なのではないだろうか」（MP 195-196/上 324）。
48. 意味－質料は、地層に取りいられ、実質となることで地層をつくるが、それ自体は、「地層の外に」（Deleuze et Guattari 1980: 60/上 104）位置している。このように、地層のなかにありながらも、「地層の外」そのものである物質は、まさに他のアジャンスマンや、他の意味－質料に開かれており、地層に変形をもたらすと言える。ドゥルーズは、後年のフーコー論やライブニッツ論で、「褶曲」（plissement）や「外」（dehors）、「襞」（pli）を主題化しているが、これらの概念は、『千のプラトーン』の物質論の延長線上に位置づけることができるだろう。また、後年の著作との関連で言えば、この物質の理論は、『シネマ2』のイメージ論とも連結可能であるように思われる。詳細な検討を要するが、『シネマ2』でなされるイエラムスレウへの参照に鑑みれば、「運動－質料」としての表現の質料は、「運動イメージ」に対応し、物質は、潜在的なイメージや「結晶イメージ」とともに理解されうるように思われる（Cf. IT 40/43-44; 49/46; 94/96; 107/110）。
49. ある物質は、あらゆる要素との組み合わせ可能性をもたらすわけではなく、特定の組み合わせ可能性に入るだけである。つまり、関係づけられるアジャンスマンや、知覚し選別する主体の制限を被ると考えられるのだが、地層には還元されず、脱地層化を導くものとして考えられる。本稿では、この可変性を偶然性と読みかえ、これが冗長性の第三の形式「と」（et）のことであると理解しているが、これでは再領土化を必然的に伴う相対的な脱領土化にとどまる可能性があるだろう（Cf. 註 44）。おそらく、脱地層化の原理として、器官なき身体をさらに徹底的に思考する必要があるのだが、そのような思考こそが、江川隆男『アンチ・モラリア——〈器官なき身体〉の哲学』河出書房新社、2014年が論じる「無様相主義」であるように思われる。